

三歳児の幼稚園入園時の分離不安

岐阜県立病院小児科 天野菜穂子
岐阜大学教育学部学校教育講座 宮本正一

キーワード：愛着，分離不安、出生順位

Separation anxiety of the 3-year-old kindergartners during the first four months of their school lives

Naoko AMANO

Pediatrics, Gifu-Prefectural Hospital, 4-6-2 Noishiki, Gifu-City, Gifu 500-8226

Masakazu MIYAMOTO

Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu 501-1112

The purpose of the present study was to examine the quality of the separation anxiety exhibited by the 3-year-old kindergartners. Of 52 children, 23 showed no separation anxiety, 14 did during only a month, and 9 did during three months and 6 during four months. The separation anxiety was related to their birth order; the youngest children displayed severe anxiety. The young children who showed severe distress were very disturbed when had a test for medical checkup by the ear, nose, and throat doctor. These results were examined and discussed in several cases.

Key words: attachment, separation anxiety, birth order

本研究は3歳児が初めて幼稚園に入園し幼稚園生活を送り始める際の、彼らの養育者との分離場面を4ヶ月にわたって観察し、そこでの愛着の特質を明らかにし、次いで愛着の質を決定している要因を検討したものである。

子どもは、1歳半になると、歩き、話し始め、自分を主張し、次第に母親との距離を置くようになる。その段階としては、以下の5段階をたどる(蘭, 1989)と考えられる。

1. 母親と一緒に遊ぶ
2. 母親がそばにいないでも、背後にいるという安心感で遊ぶ
3. 母親が家にいると分かっていると、我が家の周囲で遊ぶ
4. 母親が家にいると分かっていると、他の子どもの家や公園に出かけて遊ぶ

5. ある一定時間(3, 4時間)は、母親から遠く離れて、幼稚園などで集団生活を送ることができるようになる。

しかし、現在の交通事情の悪化、幼児誘拐などの物騒な事件の多発は、子ども自身が母親を基地として、外界へ自ら探索に出かける機会を大きく阻害している。

さらに、子どもの社会化を援助し促進してくれる人物として、これまでは、両親、きょうだい、祖父母、親戚、先生、友達、近隣の人達、近隣の子ども達が考えられるが、少子化の波は、きょうだい数を減少させ、近隣の子ども達の数をも減少させている。子どもは、きょうだい同士、近所の友達同士で、お互いの社会化を推進していくことが難しくなってしまった。そして現在も進行している核家族化は、子どもから、祖父母を遠ざけ、親戚

同士が同一地域に住むことも少なくしている。また、きょうだい数の減少から来る親戚の縮小化と共に、親戚の人たちの、子どもへの社会化の推進者として機能する機会を少なくしている。さらに輪をかけて、人間関係の煩雑さを嫌う風潮から、現在は、近隣の人々とのつき合いも極端に少なくなってきたおり、子どもが、近所の人から社会化の推進の恩恵を受ける機会は、本当に少ない。

そのような中で、現代の親子関係、とりわけ、母子関係は、今までの時代が経験しなかったほど、密着な状態にあると言わざるを得ない。

さて親と子の特別な結びつき、すなわち愛着関係の機能と発達について、これまで様々な研究や検討が行われてきた。

愛着(attachment)とは、危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の対象と近接を求め、またこれを維持しようとする個体の傾性である(ボウルビィ,1982)。ボウルビィ(1982)は、人間の乳児は、他個体との関係を築き維持しようとする行動傾向を生得的に備えており、それによって自らの適応や生存可能性を何らかの形で高めているのではないかと仮定したのである。

さらにボウルビィ(1993)は、愛着を、個体が自立性を獲得した後でも、形を変え、生涯を通して存続するものだと仮定している。行動レベルで見ると、愛着は乳幼児期に最も顕現しやすい。しかしボウルビィ(1993)によれば、他個体と近接を維持するということは、距離的に近い位置に居続けるということの意味するばかりでなく、特定対象との間に相互に信頼に満ちた関係を築き、必要なときにはその対象から援助してもらえするという確信や安心感を絶えず抱いていられるということの意味する。

ボウルビィ(1982)は、愛着の発達を4段階に分けて考察している。すなわち第1段階においては人物の弁別を伴わない定位と発信、第2段階においては一人または数人の弁別された人物に対する定位と発信、第3段階においては発信並びに移動による弁別された人物への接近の維持、第4段階においては目標修正的協調性の形成である。

さらに個人レベルでの愛着の発達様相に着目したのが Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)である。彼らは、愛着の個人差を体系的に把捉するための枠組み、Strange Situation 法を構築した。この方法は、子どもを新奇な状況に導入し、親と分離させたり、見知らぬ人に対面させることによって、ストレスを与え、そこで子どもの反応を組織的に観察しようとする実験的方法のことである。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)は親との分離や再会場面における子どもの行動によって、愛着の質を次の3タイプに分類している。

A タイプ(回避型)：親との分離に際し、泣いたり混乱を示すということがほとんどない。再会時に親から目をそらしたり、親を避けようとする。親がだっこしようとしても子どもから抱きつくことはなく、親がだっこするのをやめてもそれに対して抵抗を示すことはない。親を安全基地として探索を行うことをほとんどしない。親と関わりなく行動することが多く見られる。

B タイプ(安定型)：分離時に多少の混乱を示すが、親との再会時に積極的に身体的接触を求め、容易に静穏化する。実験全般にわたって、親や実験者に対して、肯定的な態度や感情を見せることが多い。親との分離時にも実験者からの慰めを受け入れることができる。親を安全基地として積極的に探索行動する。

C タイプ(抵抗型)：分離時に非常に強い不安や混乱を示す。再会時には親に強く身体接触を求めていくが、その一方で親に対して怒りを示し、また激しく叩いたりする。Strange Situation 全般にわたって行動が不安定で、随所に用心深い態度が見られ、親を安全基地として、安心して探索行動をすることがあまりできない。

愛着の個人差を規定する要因として、まず第1に考慮すべきは、養育者の要因であろう。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)は、母親が日常、子どもの状態や欲求をどれくらい敏感に察知しうるか、そして、子どもが示す様々なシグナルや行動にどれくらい適切に応答しうるかということが、愛着の質を分ける重要な規定因であると仮定している。

Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)によれば A タイプの子どもの母親は、子どもの働きかけに対して全般に拒否的にふるまうことが多い。こうした母親のもとでは、子どもはいくら愛着のシグナルを送っても、母親がそれを適切に受け止めることは少ない。それどころか、愛着のシグナルを出して近接を求めれば求めるほど、母親は子どもから離れていく傾向がある。結局子どもにとって回避型のパターンをとる方が、母親との距離をある一定範囲にとどめておく上で効率がよいことになる。

一方 C タイプの子どもの母親は、時に子どもの要求に適切に応じるが、あまり一貫性がなかったり、応答のタイミングが微妙にずれることが多い。こうした母親のもとでは、子どもはどうすれば母親との近接関係が維持されるのか予想がつきにくいことが想定される。この場合の最も適応的な方略は、母親の動きに絶えずアンテナを張り巡らし、自分の方から最大限に愛着シグナルを送る続けることで、母親の関心を自分に引きつけておくことであろう。

B タイプの子どもの母親は、A,C タイプの子どもの母親に比べて、子どもの要求に敏感かつ応答的で、しかもその行動は、全般に一貫しており、予測しやすいものである。こうした場合、子どもは母親に対して強い信頼感を持つことができる。子どもは自分が当惑しているとき、母親は必ずそばに来て自分を助けてくれるという確信を持ち、自分の求めに応じてくれるという理解をしているので、安定した愛着パターンを見せるようになる(Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。

もっともここで示した母親の養育スタイルは、3 タイプ間の相対的な差異であり、各タイプの母親ひとりひとりにこの知見がすべて当てはまるわけではないと考えられる。また三宅(1991)は、このタイプ間の違いが、その後の追試研究の結果と必ずしも一致しているわけではないので、この Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)の見解を絶対的なものと考えすることはできないと主張している。

さて、ボウルビィ(1993)は、愛着理論を生

涯発達の立場から考え、発達早期における愛着の個人差が、対人関係やパーソナリティ発達の基盤としてその後の生涯発達に多大な影響をもたらすものと仮定している。それでは、ボウルビィ(1993)のいう愛着の時間的連続性はどのようなメカニズムで起因するのだろうか。彼(1982,1988)はこう言及している。すなわち、個体が自ら経験する養育者との関係の質に応じて、自分と他者に関する内的ワーキング・モデルを形成し、無意識にそれを雛形として活用することで、その後の多くの対人関係を知覚・解釈し、さらには自分の行動のプランニングを行っていくのであろう。こうした内的ワーキング・モデルは、乳幼児期、児童期といった未成熟な時期に徐々に構成され、その後、加齢とともに可塑性を減じ、安定性を増していく。愛着の時間的連続性は、個々の愛着行動あるいは社会的行動を背後から支える内的ワーキング・モデルの時間的安定性によって説明される。乳幼児期の経験から取り込まれた内的ワーキング・モデルが高い時間的安定性を保つとするならば、それを基盤として発動される種々の社会的行動も、高い一貫性と連続性を備えることになる。

しかし Leiderman(1989)は、子どもの経験する様々な関係の中で、たとえ主要な愛着の対象との間の関係が不安定なものであっても、どれか一つの関係が安定したものであれば、前者の機能不全を後者が充分補い得ると述べている。

最初期の関係、つまり、親との関係がきわめて重要であることは疑い得ない。しかし、そこでつまずけば取り返しのつかないほど、人間の発達は柔軟性を欠いたものではなからう。こうした議論の今後の動向が注目される。

さて、ボウルビィ(1982)の愛着発達段階説によると、その第4段階での目標修正的な協調性形成において、子どもは、愛着対象との間で、協調的な相互交渉を持つことが可能になる。そして、内在化した愛着対象を心の拠りどころにして、特定の愛着対象以外、あるいは、家庭外の人物、仲間と幅広く相互作用することができるようになる。この時期は、3歳前後に訪れ、ちょうど幼稚園入園の年齢

に当たる。では、子ども達はどのようにして、この幼稚園入園を経験していくのであろうか。今まで、家庭の中で、共生していた状態にある母親と離れて、幼稚園の中で、自分の遊び場や、友達関係、さらには先生との心理的關係を築いていかなければならない。おそらく最初に子ども達の前に立ちただかるのは、母親との分離不安であろう。

そこで本研究においては、幼稚園における母親と子どもの登園時における別れの場面を中心にして、子どもの分離不安の状態、及びそれに対する母親の対処を中心に行動観察していく。そしてそこでの分離不安の性質と強度を決定している要因を明らかにすることを目的とした。

方 法

被験者

被験者は、1997年4月に岐阜県内のA幼稚園、及びB幼稚園に新入園した3歳児52名とその母親である。

観察期日及び場所

1997年4月から7月までの4ヶ月間である。原則として、1週間のうち、火・木曜日はA幼稚園において、月・金曜日はB幼稚園において観察を行った。

観察時間は、保育時間にあわせた。つまり
 4月11日から4月18日 9:00-10:30
 4月21日から5月2日 9:00-11:00
 5月6日から5月30日 9:00-11:30
 6月2日から6月13日 9:00-13:00
 6月16日から7月18日 9:00-14:00
 という幼稚園のスケジュールに従った。観察日以外に子どもに起こった重要な出来事は、その週の終わりにまとめて先生から伺うこととした。観察は、園庭、教室を主に行なった。その際、園の方から、新入園の場合、母子共に緊張した状態であるから刺激のない状態で観察を行ってほしいという要望があったので、観察者(天野)は幼稚園のスタッフと同様に、子供の世話をし、実際に子どもやその母親と関わりながら、観察を行った。子どもや母親の目には、担任の先生の補助をするスタッフの一員として受けとめられていたと思われる。

手続き

A,B幼稚園では、登園の際、子どもが母親と別れることを嫌がったり、泣いたり、不安そうであれば、母親は子どもと共に幼稚園で過ごすこととなっており、原則として子どもの同意なしに母親は帰宅してはいけないことになっている。

しかし、そのときの母と子の接し方は、子の分離不安が非常に強い場合は、密着することも致し方ないが、母親は子と徐々に距離を置き、子を遠くから見守るようにしていくことを、園側から要望される。そしてその間、子どもの方も、幼稚園の施設や、先生、友達になれていき、子どもは安心して幼稚園で過ごすことができるようになる。その結果、送ってきた母親と自分から別れることができるようになって、母子分離が完了するのである。従って、朝の登園時に母親と子が不安なく別れることができるようになった日を、母子分離完了の日とし、入園からの経過を記録していった。母子分離不安を示さなかった子どもに対しても、先生や友達、その子どもの母親との関わりを記録していった。

結 果

毎日の子どもと母親との分離不安の状態や園での生活の様子を観察し、4月から7月における分離状態において、分離不安の表れなかった子どもを分離不安低群、4月においてのみ分離不安の現れた子どもを分離不安中群、7月の時点では分離不安が解消したが、そこに至るまでにかなり強く分離不安を表した子どもを分離不安強群、7月に分離不安が表れている子どもを分離不安最強群と名づけ、大きく4グループ化した。

表1 性差と分離不安のタイプ

タイプ	1 低群	2 中群	3 強群	4 最強群	計
男子	15	9	5	2	31
女子	8	5	4	4	21
計	23	14	9	6	52

$$\chi^2=2.21, df=3, n.s.$$

表1に示すように、ほぼ半数の幼児はほと

んど分離不安を示さず、4月から幼稚園生活を問題なく過ごすことができた。しかしほぼ3割の幼児は分離不安が強いことが読み取れる。比較的女子のほうにその傾向があるが統計的には性差は認められない。

1年を3つの時期に分け、4月から7月に生まれた子供を早期誕生群、8月から11月に生まれた子供を中期誕生群、12月から翌年の3月に生まれた子供を後期誕生群とした。

愛着の強度との関係を表2に示した。カイ二乗の結果は有意であり、中期誕生群は分離不安が低く、後期誕生群は分離不安が強い幼児が多いことが読みとれる。

表2 誕生月区分と分離不安のタイプ

タイプ	1 低群	2 中群	3 強群	4 最強群	計
早期	8	4	3	3	18
中期	13	4	0	1	18
後期	2	6	6	2	16
計	23	14	9	6	52

$$\chi^2=15.66, df=6, p<.05$$

次に出生順位の要因を検討する。ここでは男子女子を問わず年齢の上下関係を表すために、以下ではひらがなで「きょうだい」と表現する。きょうだい構成において、その子どもが長子、中間子、末子のいずれかを決定し、分離不安のタイプとの関係を求めた。

表3 出生順位と分離不安のタイプ

タイプ	1 低群	2 中群	3 強群	4 最強群	計
長子	10	5	8	0	23
中間子	2	2	0	1	5
末子	11	7	1	5	24
計	23	14	9	6	52

$$\chi^2=13.79, df=6, p<.05$$

表3に示すように、長子と末子はほぼ同率であるが、末子の方が分離不安最強の幼児が多いことが示唆される。

母親が幼稚園に子どもを迎えに来たときの子ども様子を観察した結果は3つに分類した。一つ目は、母親を喜んで迎え、幼稚園

での出来事を話したり、うれしそうに手をつないだりするグループ、二つ目は、母親のところへ行き手をつないだりするが、積極的に話しかけたりすることがないグループ、三つ目は、母親の出迎えに対して表情がなかったり母親を避けたりするグループである。そしてこれは、入園当初の慣れないことからくるお迎え時の混乱がおさまった5月に観察を行った。分離不安との関連を表4に示した。しかし有意な値には達しなかった。

表4 母親と再会直後の子どもの様子と分離不安のタイプ

タイプ	1 低群	2 中群	3 強群	4 最強群	計
喜ぶ	4	4	3	1	12
中間	14	10	2	4	30
無表情	5	0	4	1	10
計	23	14	9	6	52

$$\chi^2=9.33, df=6, n.s.$$

本研究の場合、観察者自身は子ども達にとっては自分達の世話をしたり遊んだりするが、当初は見知らぬ人であったと思われる。したがって観察者(天野)は「見知らぬ人が週2回接した場合、その人に対する子ども達の不安がどのようなものであるか」という点も観察したことになる。そこで、入園直後の4月の時点において、子ども達が観察者に対して示した態度をまとめて分類した。

表5 見知らぬ人に対する態度と分離不安のタイプ

タイプ	1 低群	2 中群	3 強群	4 最強群	計
親密	10	4	1	1	16
中間	7	8	4	1	20
疎遠	6	2	4	4	16
計	23	14	9	6	52

$$\chi^2=9.69, df=6, n.s.$$

その際、積極的に筆者に話しかけてきたり、関わってきた子どもを親密群、自分から関わってくることはしないが、観察者の働きかけ

たことに関しては応じた子どもを中間群、観察者が働きかけようとするのを避けたり、観察者と目を合わさないようにした子どもを疎遠群とした。表5に示すように、親密群は分離不安が低い傾向が見られ、疎遠群にはその偏りは見られないが統計的には有意ではない。

B幼稚園において、5月9日に耳鼻科検診が実施された。幼稚園でお医者さんに耳や鼻を診て見てもらうことに対して、事前に先生から説明があったにもかかわらず、子ども達の中には大きな不安を示した子ども達があった。そこで自分たちの教室から保健室まで並んで歩いていく途中で泣きわめいて進めなくなってしまうたり、逃げ出したり、先生に泣いてしがみついたりといった情緒的混乱を示した子どもを混乱有群、混乱を示さず耳鼻科検診を終えた子どもを混乱無群とした。そして分離不安との関係を表6に示した。

表6 耳鼻科検診時の子どもの情緒的混乱と分離不安のタイプ

タイプ	1 低群	2 中群	3 強群	4 最強群	計
混乱無	7	9	1	0	17
混乱有	3	4	7	3	17
計	10	13	8	3	34

$$\chi^2=11.02, df=3, p<.05$$

表6から分かるように、分離不安の強い子どもは情緒的混乱を示すことが多いことが分かる。

表7 教師との密着の有無と分離不安

タイプ	1 低群	2 中群	3 強群	4 最強群	計
密着無	23	13	4	4	44
密着有	0	1	5	2	8
計	23	14	9	6	52

$$\chi^2=17.55, df=3, p<.01$$

多くの子ども達はふと母親を思い出したり、友達とのトラブルに対処できなかつたり、けがをしたりすると、先生を幼稚園での安全

基地であるかのように頼り、何かを訴えたり、時には言葉もなく抱きついたりする。しかしそういった一時的な先生との触れ合いではなく継続的に教師に接触している子どもがいる。登園後母親と別れた後、ずっと先生の後追いをしていたり、絶えず先生と手をつないでいないと不安でたまらない子ども達を教師密着有群、そのような状態にはならない子ども達を教師密着無群と呼ぶ。

表7に示すように、先生との密着の有無と分離不安のタイプとの間には有意な関係があり、密着反応を示した幼児は分離不安の高い子どもに多かった。

考 察

表1より、性差と分離不安のタイプとの間に有意な関係はなかった。柴田(1990)も、0歳から3歳までの保育園児を観察している。登園直後の行動観察の結果、分離不安反応と性差の間には有意な関係が見られなかったと報告している。よって、性差が分離不安に有意に働くとはいえないようである。

表2より誕生月が遅い幼児に分離不安の強い子どもが多く見られた。横浜(1980)も保育園児の登園直後の行動を観察している。年齢は生後6ヶ月から48ヶ月である。その結果、18から30ヶ月児が最も高い分離不安を示し、月齢がすすむにつれ分離不安は減少していったと報告している。柴田(1990)も、分離不安反応が1歳児群、2歳後半児群、2歳前半児群、3歳児群と弱くなっていることを報告している。ゆえに、誕生月の遅い子ども達が高い分離不安を示すという結果は、妥当性のあることであろう。

表3より末子であり、かつ最強の分離不安を示した子ども達5名のうち3名は女子で、姉が同じ幼稚園に在籍していた。この3名の女子は、登園後母親と別れづらい状態であったが、姉がいると不安が軽減し遊ぶことができた。しかしおやつ時間になり姉と別れて自分の教室に戻らなければいけない時間になると、母親の時と同様に姉と別れづらい状態になって姉にしがみついたり、自分の教室に戻ってもロッカーの中に入り込んだりす

るなど不安が強まった。また長子で分離不安強群に分類された子ども達8名の中には、長子であるが故に大人の中で遊び、子ども集団で遊ぶ経験がほとんどないと考えられる者が半数いた。このようにきょうだい順位には、様々な要素が絡み、分離不安のタイプとの関係を複雑にしていると思われる。

表4より再会直後に母親に対して示す子どもの様子と分離不安のタイプとの間に有意差は見いだせなかった。しかし母親と再会して喜ぶ姿を見せる子どもは、分離不安の強度が大きくなるにつれて、その比率が小さくなっていく傾向にあった。また表4において、同じ分離不安最強群であっても母親と再会直後に喜ぶ姿を示すグループと無表情なグループの各1名は、母親の態度が対照的だった。喜ぶ姿を示すグループに属する子の母は、不安の強い我が子に寄り添っていたが、喜ぶ姿を示さないグループに属する子の母は、我が子に話しかけることがあまりなく、しがみついてくる子どもをうさがることがたびたびあった。また母親との再会直後に無表情なグループで、分離不安の低い群に属する子ども5名は、迎えに来た母親と目を合わせず、母親を避けたり、他のことに夢中になっていて母親に対する関心が薄い様子であった。この子ども達は、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)のStrange SituationのAタイプに近いと考えられる。

本研究ではCタイプに相当するような、母親との再開時に強く身体接触を求めたり、怒りを示して母親を叩くという行動を示す子どもを見出すことができなかった。本研究における分離不安強群や最強群は、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)のStrange Situation法によるCタイプを含んでおり、Aタイプは分離不安の低い群に含まれてしまうので、再会直後に母親に対して示す子どもの様子と分離不安のタイプとの間の関係をより複雑なものにしていると考えられる。

表5より、見知らぬ人に対する態度と分離不安のタイプとの間に有意な関係は見られなかった。横浜(1980)は、6ヶ月から42ヶ月の保育園児にとっては観察者は見知らぬ人となるという前提で、本研究と同様の観察を行

っているのであるが、ここでも強い不安を示したのは、30から36ヶ月児、18から24ヶ月児、24から30ヶ月児、12から18ヶ月児、6から12ヶ月児、42から48ヶ月児、36から42ヶ月児の順であった。繁田(1982,1987)は、Strange Situation法を1歳、2歳、3歳の子ども達に実施した結果、3歳児は、1,2歳児に比べ不安を示すことなく活発に見知らぬ人と遊んだことを報告している。本研究の被験児が36から48ヶ月児であることを考えると、もはや見知らぬ人に対する敏感な時期は過ぎているのかもしれない。しかし表5より見知らぬ人に対して親密な態度を示す子ども達は、分離不安の低い群である比率が高い傾向にあった。このことはStrange Situation法によるBタイプの子どもの特徴と一致していると考えられる。

表6より、耳鼻科検診時に情緒的混乱のあった子ども達は、分離不安の強い群に多く見られた。Strange Situation法は、子どもを新奇な状況(実験室)に導入し、親と分離させたり、見知らぬ人に対面させることによって、ストレスを与え、そこで子どもの反応を組織的に観察しようとする実験的方法であるが、本研究での耳鼻科検診は、まさに新奇な状況に該当する。子ども達にとって、幼稚園でお医者さんに診てもらおうということは、思いもよらない出来事だったのである。分離不安の高い子の中には、「お母さん迎えに来たとき、ここわかる？」と泣いて訴えた子がいた。情緒的混乱を示した子どもが、同時に分離不安の高い子どもである確率が高い傾向にあるのは、これらの指標の妥当性が高いことを示している。

表7より分離不安の低い群の子ども達は、一人も先生と密着する姿はなかった。しかし分離不安の低い群の中には、Strange Situation法によるとAタイプと考えられる子ども達が含まれていることを考慮しなくてはならないだろう。この子ども達にとって、先生に密着しないということは、ある面では問題であると考えられるからである。先生と密着していた子ども達は8名である。そのうち、分離不安中群の子1名は、入園後1ヶ月ほど先生の背中にくっついたり、膝に乗るな

どしていたが、自分の興味をひく遊びが見つかり、また幼稚園で他の幼児と遊びの約束をすると、帰宅してから、その友達と遊ぶことができるということを知り、遊ぶ約束をしてそれぞれの自宅で遊ぶということが、彼にとって目新しくまた自分の世界を広げることもなった。その子は、友達と遊ぶというおもしろさの発見から先生の膝から離れていった。

分離不安強群の子ども達5名は、先生にしがみついたり、抱きついたり、手をつないだりしてきたが、先生の方からも積極的に働きかけた。先生は、子ども達にシャボン玉や、泥遊び、水遊びをさせるとき、必ずその遊びの輪の中に、彼らを入れ、遊びの楽しさを体験させていた。その中で、分離不安強群の幼児は、自分に合う友達を見つけ自分から遊ぶことができるようになって、先生から離れていった。

常田(1997)は、「愛着を基盤とするような先生との関係は、幼児期の保育にとって重要である。なぜなら、第一に、先生によって受容されているという安心感が、子どもの園生活全般の安定をもたらすと考えられるからである。また第二に、幼児期は、一般に子ども間の関係を発展させることが重要な課題となるわけだが、先生との関係が安定している子どもほど、子ども同士の関係をうまく形成することができるからである」と述べている。先生が密着してくる子どもをまず受容し、子どもと先生の間に信頼関係を築く一方で、子どもが仲間関係を作っていくのを援助していくという行為は、まさに常田(1997)の考え方に沿ったものといえ、興味深い。また、上記の分離不安中群、分離不安強群の子ども達6名は、すべて最長子であるため、きょうだいの上の子との関わりの中から、遊びの手続きや複数で遊ぶことの楽しさを学ぶことができなかつたと思われる。したがって先生の援助を通して、遊びの楽しさや手続きを知って、一人立ちしていったものと考えられる。先生に密着することがなかった分離不安強群の子ども達4名にも、先生達はいろいろな遊びを教えたり、その遊びの輪の中へ彼らを招き入れるなど関わりを多く持ったことが、

7月に彼らが分離不安を解消していったことの要因となつていったのだと思われる。

以上を要約すると、きょうだい関係で末子であったり、誕生月が遅いと分離不安が表れやすいということが分かった。また分離不安の強い子どもほど耳鼻科検診のような新奇な事態には混乱に陥りやすく、先生と密着することによって心の安定を得ているということがわかった。

本研究においては7つの項目と分離不安の強さとの関係で、新入園児の母子分離に伴う子どもの不安を見てきたのであるが、実際に子ども達に接してみると、母親と別れる不安というものは、ある日突然に解消していくものではなく、子ども達が幼稚園の生活の中で行きつ戻りつしながら、徐々に乗り越えていくものであることが実感できた。そしてこのことが、一人一人の子どもにとって大変な作業であることがよくわかった。分離不安を全く表していない子どもといえども体調のよくないときや、友達のお母さんがその子に寄り添っている姿を見ると、自分の母親を思いだして心が晴れずに遊びに熱中できないときもある。しかしそういうとき優しく抱きしめてくれたり、心配そうに見守る先生や仲間の存在も、その子の心の大きな支えとなっているようである。今後は行動観察の背後にある認知的側面に注目して検討を加える予定である。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Lawrence Erlbaum.
- 蘭 香代子 1989 母親モラトリアムの時代
北大路書房
- ボウルビー,J. 1982 黒田実郎・大羽S・岡田洋子(訳) 母子関係の理論 愛着行動 岩崎学術出版 (Bowlby,J. 1969 *Attachment and loss*, Vol. 1, Attachment. Basic)
- ボウルビー,J. 1982 黒田実郎・岡田洋子・

- 吉田恒子(訳) 母子関係の理論 分離不安 岩崎学術出版 (Bowlby,J. 1973 *Attachment and loss*, Vol. 2, Separation. Basic)
- ボウルビィ,J. 1988 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子(訳) 母子関係の理論 愛情喪失 岩崎学術出版 (Bowlby,J. 1980 *Attachment and loss*, Vol. 3, Loss. Basic)
- ボウルビィ,J. 1993 二木武監訳 母と子のアタッチメント—心の安全基地 医歯薬出版 (Bowlby,J. 1988 *A secure base; Parent-child attachment and healthy human development*. Basic)
- 遠藤 利彦 1997 子どもの社会的発達 第1章 愛着と発達 pp.8-31 東京大学出版会
- 繁多 進 1982 アタッチメントの発達に関する実験的研究 保育園児と家庭児の比較から 日本教育心理学会第24回発表論文集 pp.78-79.
- 繁多 進 1987 愛着の発達 母と子の結びつき 大日本図書
- Lieberman, A. F. 1977 Preschoolers' competence with a peer: Relations with attachment and peer experience. *Child Development*, **48**, .1277-1287..
- 三宅 和夫 1991 乳幼児の人格形成と母子関係 東京大学出版会
- 柴田 幸一 1990 母子関係と集団保育 登園時における母子分離不安の及ぼす諸要因 pp.12-20 明治図書
- 常田 秀子 1997 子どもの社会的発達 東京大学出版会 pp.70-89.
- 横浜 恵三子 1980 保育場面と実験場面における乳幼児の不安に関する研究 教育心理研究 28 28-37.